

## 複合刺激対象に対する態度の感情的側面についての一研究

小 川 浩

### 問題と目的

我々は日常生活において、特定の個人及び集団に対し、「好き—嫌い」、「良い—悪い」、「望ましい—望ましくない」といった単一的かつ単純な感情的評価的判断を下したり、さらには、他者のそういった判断を推測したりする。これらの判断対象は極めて複合的であり複雑である。すなわち、それらの対象は我々の認知世界においては、多数の帰着属性を構成要素とする複合概念として存在していると考えられるのである。対象が特定の個人である場合、我々はその当該人物の身体的特徴、社会・経済的特徴、行動特徴、さらにはパーソナリティ特徴などを把握し、その人物をその人物として認知し、他者と弁別することができる。集団の場合には、主として構成メンバーが構成要素となろう。このように複合的な対象に対して我々が単純な感情的評価的判断を下す動機は、それが対象に関する行為を方向づけ決定する際の一つの重要なモメントとなっているところにかかわれる。では、このような判断がなされる心理的過程は如何なるものであろうか。本研究では、この問題を主な研究対象として扱う。

我々は対象そのものについて「好き—嫌い」、「良い—悪い」とかの判断を下すと同時に、その対象がもつとされる特徴つまり帰着属性一つ一つについても、そうした判断を下すことができる。このような個々の特徴についての判断が、対象そのものについての判断を決定づけるのに重要な役割を演じていることは恐らく間違いないであろう。こうした問題についての方法論・理論の両面においての先駆的研究は、Asch, S.E. (1946) の印象形成に関する研究である。彼は、いくつかの形容詞特性語を情報として与えて、架空人物についての印象を形成させることが可能であることを明らかにし、さらに、諸特性が個々ばらばらではなく或るまとまりをもった全体として印象を形成するものであって、特性間の相互の関係が重要なものとして働くことを指摘している。1960年以降には印象形成の過程を Asch のゲシュタルト的立場でなく、モザイック的立場に立って再検討する傾向が生じてきた。ここでは情報統合の単純な数学モデルの創案とその実験検証に力が注がれている。それらのモデルは一般的には線型モデルであり、複数個の情報項目からなる複合対象についての判断は、それを構成する個々の情報項

目の値の直線関数であるとするものである。Anderson, N.H. (1962, 1965 a, b, 1966, 1967) は、対象そのものについての判断は、諸コンポネントについての判断の平均であるとする平均モデル——

$$J = \sum W_k \cdot S_k / \sum W_k$$

を、Fishbein, M. (1963) は、和であるとする加算モデル——

$$J = \sum W_k \cdot S_k$$

を、また、Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. (1957) は、諸コンポネントについての判断に、その極性度(極端さ)でウェイトづけた平均であるとする適合モデル——

$$J_d = \sum d_k \cdot S_k / \sum d_k$$

を、それぞれ提起している。そして、これらのモデルを支持する証拠や反証が様々な研究から提出されており、混沌としているのが現況である。それは、このような情報統合過程に関心が向けられて未だ日が浅く、モデルの検証方法やモデルを適用する実験事態が研究者によってまちまちであることによるものであろう。

本研究は第1実験と第2実験とから構成される。第1実験では単一の個人を対象として、また、第2実験では2者(dyad)および3者(triad)の集団を対象として扱い、情報統合の過程を検討してみた。そこでは、従来の研究とは異って現実の人物の顔写真を用い、仮定の行動場面を設定することによって、実験事態を一層現実的なものにする。

### 第1実験

第1実験では女子大学生(n=32)を被験者とし、被験者と同年令の女子大学生であって、予備調査で予めその好悪度がわかっている4名の人物(H, M<sub>1</sub>, M<sub>2</sub>, L)を刺激人物とした。これらの人物の顔写真各1枚、計4枚を提示し、人物についての印象を形成させ、特徴を思いつくまま自由に列挙させた。次いでそれら特徴の帰着確信度を4点尺度で、さらに人物についての好悪度と、「寮または下宿のルームメイトとして一緒に住んでみたいか否か」という仮定の場面設定での行動期待度をそれぞれ7点尺度で評定させた。1週間の間隔を置いて第2セッションに入り、各被験者に自分が列挙した個々の特徴についての好悪度と、上述の行動をとるのに際しての特徴の望ましさを、それぞれ7点尺度で評定させた。

第2セッションで得られた列挙特徴の各尺度値を下記の4種の平均公式でプールして各被験者毎に、各人物についての好悪度ならびに行動期待度の予測値を算出し、第1セッションで得られた実測値との対応度を相関係数ならびにD得点<sup>\*</sup>によって求めた。

①：等ウェート

$$P_1 = \sum_{i=1}^n X_i / n$$

②：帰着確信度でウェートづけ

$$P_2 = \sum_{i=1}^n a_i \cdot x_i / \sum_{i=1}^n a_i$$

③：極性度でウェートづけ

$$P_3 = \left\{ \sum_{i=1}^n |x_i - d| \cdot (x_i - d) / \sum_{i=1}^n |x_i - d| \right\} + d$$

④：帰着確信度と極性度で2重にウェートづけ

$$P_4 = \left\{ \sum_{i=1}^n a_i \cdot |x_i - d| \cdot (x_i - d) / \sum_{i=1}^n a_i \cdot |x_i - d| \right\} + d^{**}$$

結果の主なものは次の通りである。予測値と実測値との相関は0.43~0.71の範囲内にあり、どの平均公式もほぼ同じ程度の対応のよさを示していた。これらの相関はAnderson, N.H. (1962)の相関( $r=0.956$ )よりもかなり低かった。これは、Anderson, N.H.の研究では架空の人物にパーソナリティ特性だけを帰着したのに対し、ここでは写真の人物を扱ったので帰着特性が多種多様であったためと考えられた。帰着確信度が余りウェートとしての機能を果していないことがD得点から分ったが、これは被験者自身が特徴を列挙していたからであると考えられた。実測値は予測値よりもネガティブな方向にあり、人物に帰着したネガティブな特徴により大きなウェートをかけて、その人物を判断する傾向にあり、特に具体的行動場面での判断にその傾向が著しいことが分った。

## 第2実験

第2実験では女子大学生( $n=92$ )を被験者とし、予備調査で予めその好悪度が分っている第1実験で用いたのと同様の9名の人物(H<sub>1</sub>~<sub>3</sub>, M<sub>1</sub>~<sub>3</sub>, L<sub>1</sub>~<sub>3</sub>)を刺激人物とした。これらの人物の顔写真各1枚、計9枚を提示し、印象を形成させ、第1実験と同様の仮定の行動場面を設定し、④9名の人物1人1人について、⑥9名の人物

物を対に組み合わせで作られる、HH~LLまでの11通りのdyadの各々について、④HHH~LLLまでの10通りのtriadの各々についての行動期待度を7点尺度で測定した。最後には、④各dyadおよびtriadの2者および3者間にあると認知される関係の内容を、「仮にこれらの2人(または3人)が寮または下宿で一緒に住むことになったら」という仮定の行動場面を設定して多肢選択法で扱った。選択肢は、①完全分離(初めからトラブルが生じ分離)、②不完全分離(次第にトラブルが生じ分離)、③不完全結合(初めのうちトラブルが生じず結合)、④完全結合(初めからトラブルなくずっと結合)の4つである。

④で得られた9名の各人物の尺度値を下記の平均公式でプールして、各dyadおよびtyiadについての行動期待度の予測値を算出し、⑥および④で得られた実測値との対応度をみるために、第1実験と同じように両者の間の相関とD得点を求めた。

①：等ウェート

$$P_1 = \sum_{i=1}^n x_i / n$$

②極性度でウェートづけ

$$P_3 = \sum_{i=1}^n |x_i - d| \cdot (x_i - d) / \sum_{i=1}^n |x_i - d|$$

( $n=2$ または $3$ ,  $d$ は尺度の中性点)

主要な結果は次の通りである。各dyadおよびtriad毎に、また、各被験者毎に算出した相関はいずれもかなり高く、平均相関は前者の場合0.44~0.62、後者の場合は0.74~0.83であり、上記の両平均公式の対応のよさが認められた。各被験者の9名の人物1人1人についての評定に基づくdyadの組み合わせ〔(7.7)から(1.1)までの28個の組み合わせ〕およびtriadの組み合わせ〔(7.7.7)から(1.1.1)までの84個の組み合わせ〕を、それらの予測値の高低5段階で5群(H<sup>++</sup>, H<sup>+</sup>, M<sup>0</sup>, L<sup>-</sup>, L<sup>--</sup>)に分類し、それら5群の実測値と予測値の平均値を、2者および3者の間にあると認知される関係の4つの型の各々毎に求めて予測値と実測値との対応を調べてみた。その結果、結合的な関係はdyadおよびtriadに対する行動期待度をポジティブな方向に、分離的な関係はネガティブな方向に導びく働きをしていたことがわかった。

\*  $D = \sqrt{\sum_{i=1}^n (X_i - Y_i)^2 / n}$

\*\*  $x$ …個々の特徴の好悪度又は望ましさ。 $n$ …列挙された特徴の数。 $a$ …個々の特徴の帰着確信度。 $d$ …好悪又は望ましさについての評定尺度上の中性点。

\* 第1実験から、行動期待度は好悪度と高く相関することがわかっており、両者は共に人物に対する好意度の指標たりうるとみなされる。